

水俣調査全体 「水俣を感じて ～想い～」

講師：水俣のみなさん 講義日：2014年6月27日（金）～29日（日）

「魂のもっとも深いところが震えるまち」水俣に降り立った。何を感じることができるのだろうか？期待と不安が交錯する。

### 1 白子の物語 ～ 杉本水産／杉本肇さん ～

水俣に生きて人間の憎悪の渦中に身を置き、苦しみ、もがいてきた経験、そして、杉本少年が受け止めきれない重い現実、しかし、それを乗り越えてきた。それは、母栄子さんと家族の深い愛情があったからだ。水俣病を憎まらず、苦しみや悲しみがあっても、最後に笑顔があれば、その苦しみや悲しみも神が授けてくれた「のさり」と思うことができるのだと。余りにも衝撃過ぎて、受け止め切れなかった。しかし、人としてどう生きるべきかを知るために受け止めなければならない。心と肌で感じるしかないのだ。

### 2 希望をつくる ～ 水俣資料館 ～

資料館は教訓だけを教えるだけではなく、笑顔・希望を与えるものでなくてはならない。入り口に掲げられている「水俣資料館はおきたことを明らかにしながら、犠牲を無駄にしない社会づくりに役立て、未来に生きる希望をつくるためにあるのです」という吉本さんの言葉を目にすることができる。水俣病を客観的にとらえ、水俣病で苦しんだ当事者、水俣の経済の発展に貢献しながら加害者となったチッソの姿など、おきたことを明らかにし、関わった多くの人たちの苦悩を学ぶことができる。そして、この資料館の象徴である「希望」は杉本家の感動のエピソードにまつわる笑顔の展示で伝えている。「施設の地元学」を実践し、職員の手づくり展示が一層の学びを与えてくれている。

### 3 凱旋門に茶畑をつくる ～ 天の製茶園／天野浩さん ～

水俣の海を離れ、標高300mの石飛地区の天の製茶園に向かった。ここは、環境マイスターの天野親子が営む製茶園である。あいにくの雨で茶畑を見ることができなかった。バスを降りて向かったところは、手作り感満載の囲炉裏を持つ館であった。人は火を囲むと安らぎ、心を開く。程よい距離感なのだろう。息子の浩さんの話を聞いた。本物づくりへの覚悟と熱い想いは心に響く。そして、仏国への事業展開という大きな野望を語る浩さん「ゆくゆくは凱旋門の前に茶畑をつくる」と・・・なぜか、本当につくってしまいそうな感じがしたのは私だけではなかったと思う。

### 4 化粧 ～ 頭石村丸ごと生活博物館 ～

屋根のない博物館に住む人たちの第一印象は眩しい笑顔であった。勝目さんに博物館を案内してもらった。眼を輝かせ、説明してくれる。頭石の歴史やそこに吹く風、見えないものを見ようとする、目の前にある石積みや流れる水、植物、あるものに興味を示す。ただそれだけで楽しく、わくわく心が躍る。探究心がこうまで人を変えるのか？これは頭石の人たちと同じ感覚なのか？頭石は人に見られることによって化粧し、ますます元気になっていく。しかし、その本質はそこに住む人たちの想いと行動があったからだ。本質がなければ、どんなに化粧をしても輝かない。ここ頭石は笑顔と元気という化粧があった。

### 5 期待 ～ 講演 吉井正澄 元水俣市長／私のまちづくり履歴から一職員に期待すること ～

激動の渦中にあり、水俣再生に尽力された吉井元市長のお話は、行政に携わる者のあるべき姿を問い、期待を込めた強い想いを感じることができた。「距離を近づけ話し合い、対立のエネルギーを創造のエネルギーへ転換する。

そのためにもお互いの違いを認め合う。そして、自治体職員は現場、現実、現物に即した行動をとってほしい」と言われた。まさに、住民との対話を大切に、市民が要求していることを知り、肌で感じ、確かめ、実行していくことが最も重要であることを再認識した。また、「市民が動いたところに行政が参加する。行政参加だ」という言葉は、市民と市民のコーディネート役に徹することの大切さに気づくことができた。

## 6 感謝の意 ～ 交流会 ～

水俣でお世話になった全ての方々に感謝する場として、設定していただいた。水俣弁で「じゃあおいでよ」という意味をもつ「あばあこんね」の若者のグループの話しも聴くことができた。そして、何よりも水俣の皆さんの熱い想いを深堀して聴くことができたことが、大きな収穫であった。全ての方々への感謝の意を伝える機会をいただいたにもかかわらず、想いを言葉に表すことができない自分に腹立たしさを覚えた。悲しかった。悔しかった。改めて感謝の気持ちを伝えたい。ありがとうございました。

## 7 元気な女性たち ～ ごみ減量女性連絡会議／沼田悦子さん、松木幸蔵さん ～

国際環境都市・水俣の一翼を担う「ごみの減量化」の取り組みは、女性が中心だ。女性は「好きか嫌いかで動く」ということに象徴されるように行動力と豊かな発想力で水俣のごみ減量に大きく貢献している。リサイクルという出口の発想に捉われず、入り口からの戦略である。家庭に入ってくるゴミを減らすため、容器包装のトレイを96品目中、76品目を廃止にしている。入り口戦略は、ごみ減量の根っこだと感じた。ただそれだけではない。販売側にもメリットを持たせる「エコショップ認定制度」で共存の仕組みをつくっている。これからのまちづくりは、女性の潜在能力を活かしていくことが不可欠である。

## 8 売り上げを伸ばす ～ 中央商店街の取り組み／笹原和明さん、永里寿敏さん、松木幸蔵さん ～

「商店街の振興」ということばが嫌いだということに衝撃を受けた。「商店街の振興」で議論すると、漠然とした議論だけになって、目指すものがぼけてしまう。商店が最も求めているのは「儲けること」であり、そのために何をするかを考えなければならない。商いの原点である。そして、やろうとする想いの人が行動し、周りを巻き込み、広げていくことが重要だ。もちろん、商品に込める想いも大切である。どうして作るのか、何にこだわるのか、を明確にすることで自信をもって提供できる商品が生まれる。しかし、これは手段であって本当の想いはほかにある。それは、水俣の資源を使って全体をつなげること。そして元気になることである。水俣への深い愛情を感じた。

## 9 激震 ～ 水俣を肌で感じ ～

水俣の皆様「心からのおもてなしに、心から感謝します。ありがとうございました。」と言いたい。水俣病は、まちを支えてきた側が加害者になり、外からの支援や立場の違いでそこに住む住民同士が憎みあうという、複雑に絡み合う人間関係が問題をより深刻にし、解決への道のりを険しくした。その人間の憎悪の渦中に身をおいた市民は苦しみ、悲しみ、もがきながらもその先に希望をもって乗り越え、生きてきた。

今回お会いした全ての人から感じ取ったこと。それは、水俣に起こった事実から目をそむけず、学び、水俣のあべき姿を問い、その逆境を希望のエネルギーに変えて取り組んでいる。その結果、同じ繰り返しをしないために、人や自然、全ての環境に配慮したものづくりをしている。そして、妥協をせず本物を追求し、常にハードルを高くしている。なによりも、地域を想う熱量の大きさに圧倒された。それだけではない、笑顔を絶やさず、楽しんでいることに驚かされた。吉本さんの「人が育つのはすさまじい逆境と笑顔だ」と言っていることは、まさにこれなのだろう。

水俣の人と空気に触れ、余りにも深く、大きすぎる想いとできごととに心を激しく揺さぶられた。人の想いに寄り添い、つながること、その先に希望を見出すことの大切さを実感した。